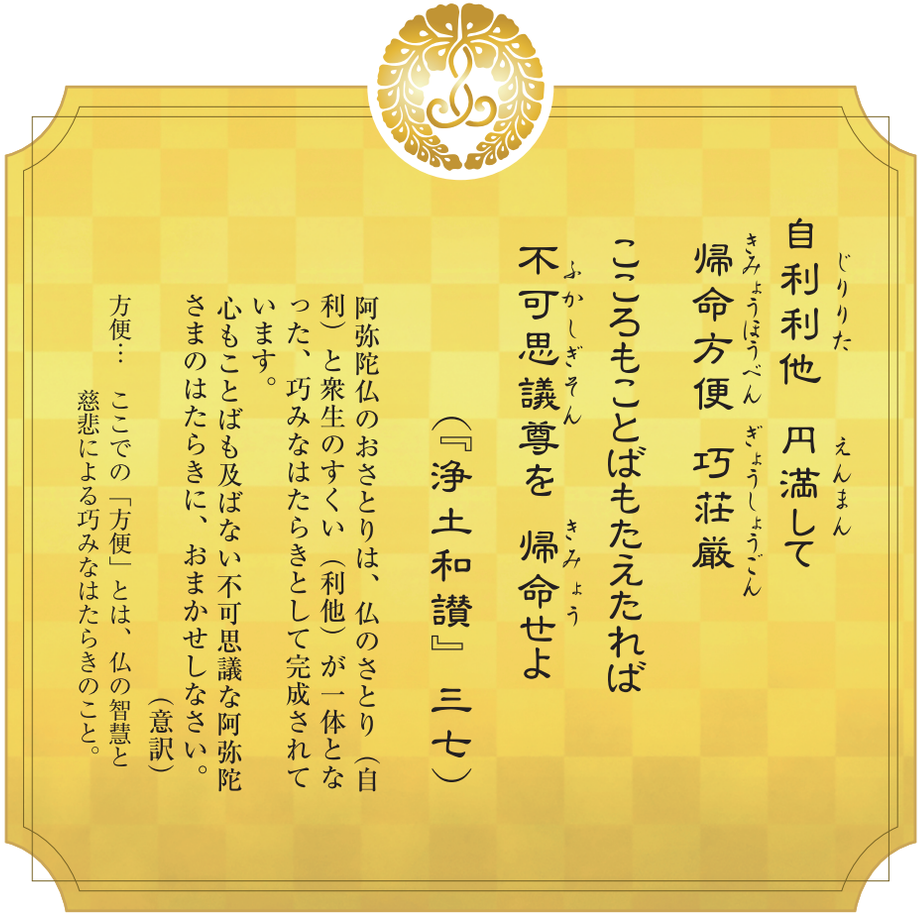
しあわせ

9　月　号



自利利他（じりりた）　円満（えんまん）して
帰命方便（きみょうほうべん）　巧荘厳（ぎょうしょうごん）
こころもことばもたえたれば
不可思議尊（ふかしぎそん）を　帰命（きみょう）せよ

（『浄土和讃』　三七）

阿弥陀仏のおさとりは、仏のさとり（自利）と衆生のすくい（利他）が一体となった、巧みなはたらきとして完成されています。
心もことばも及ばない不可思議な阿弥陀さまのはたらきに、おまかせしなさい。
（意訳）

方便…　ここでの「方便」とは、仏の智慧と慈悲による巧みなはたらきのこと。

「手を合わす母」

朝夕に　かぎりを尽し　鳴く虫と
ともに詠みたし　心ゆくまで

昨年の「大乗」歌壇に載っていた歌。病室に響いてくる秋の虫たちの鳴き声を耳に「かぎりを尽くし・・・、ともに詠みたし」と詠んでいる詠み人の心境が響いてくる。

病床にある身に響いてくる虫たちの力いっぱいの鳴き声に勇気づけられ、生かされている今日という日を〝心ゆくまで〟精一杯果たしぬこうという思いが感じられる。健康であっても明日という日は約束されていない。病を得たからこそ今日あるわが命への感謝を実感するのは人の常であろうか。

四苦八苦の人生だからこそ、感動と感謝があふれてくる不思議。その不思議に気づかせてくださる働きがナンマンダブ、お念仏の不思議である。たとひ大千世界に　みてらん火をもすぎゆきて
仏の御名を聞く人は　永く不退にかなふなり

法座案内

秋季永代経　彼岸法要

九月　九日　昼席・夜席
　　十日　昼席

講師　福田康正師（山口県　専福寺住職）

※本堂内は二四時間換気をしておりますが、お参りの際はマスク着用をお願い致します。

法味の会　ーご和讃の味わいー

九月　十八日　午前十時～

お話　住職

府中町山田二丁目二十五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二ー四八二三

【ご和讃をよむ㉘】～わかるはずもない～

今回のご和讃では、「自利利他円満」といわれる阿弥陀さまのおさとりは、こころもことばもおよばない尊いさとりであることが讃えられています。「自利利他円満」とは、自らが仏となることと、他のすべての人々をすくうことが、けっして分けられない一つのことがらとして完成しているということです。分けない、ここが今回のポイントです。

仏教では、人間のこころのはたらきを分別知（ふんべっち）といいます。分かった、と言うように、人間はものごとを言葉で分別することで認識しています。善と悪、自と他、生と死、昼と夜など、見るもの聞くものすべてを言葉で分けて、分かった！と安心しているわけです。分かるとは、分けることなのですね。ですから逆に言葉で分けられないものに遇うと、分からない…と不安になります。このようなこころを分別知といいます。

しかし本当にものごとは、言葉が分かれているようにはっきり分けられるでしょうか。他者といいますが、その他者に支えられなければ生きられないのが自分ではないでしょうか。うす暗い「あかつき」時は、はたして夜でしょうか、朝でしょうか。白と黒は正反対ですが、わたしは「その白衣、まっ黒じゃないの！」と、いまだに母から叱られます。まっ黒な白衣は、はたして白いのか、黒いのか。言葉は分かれていても、現実のものごとには、そのような分かれ目は見出せないようです。分けられないものを分けて、「わかった」つもりになっている、それが私たちなのですね。

一方、仏さまのこころは無分別智（むふんべっち）と言われます。分けることなく、ものごとを見通すまなざしです。右手が傷つけば左手がパッとかばうように、仏さまは無条件に、苦悩の衆生を抱かずにおれません。それは、自他を分けず、他者のいたみを自らのいたみと感じるこころを開いておられるからなのですね。その無分別智（むふんべっち）の具体的なありさまこそ、自利利他円満といわれる阿弥陀さまのおこころなのでした。

「わかってたまるか！」

忘れることのできない恩師のひとり、利井明弘先生のことばを思いだしました。けっして器用ではなかった先生は、立て板に水ではなく、いつもとつとつと喋られる方でしたが、「これ、ごっついな！」と、誰よりも慶びながら仏さまのお話をされる先生の言葉は、ずっしりと体重がのっており、一言一言が身にこたえました。そんな先生の講話を、あるご住職がはじめてお聴聞されたときのことです。勉強会が終わって先生を囲んで団らんしていたところ、そのご住職がひと言、

「先生、有難うございました。けれど今日のお話は、まあ、よくわかりませんねえ」

初対面でなかなかきびしいコメントですが、先生は間髪入れず、返されました。

「わかってたまるか！」

仏さまのみ教えは、そもそも「分かる」ような話ではない。見事なカウンターパンチをもらったご住職は、それから先生がご往生されるまで通いつづけ、お聴聞を慶ばれました。

そういえば先生が大好きだったお酒も、説明して分かるものではないですね。お酒は分かるものではなく、いただくもの、聞くもの、味わうものでしょう。仏さまの仰せも、聞くほかない、いただくほかないものでした。それは阿弥陀さまの仰せが、そもそも、分けないこころから出ているからなのですね。

衆生のいのちを我がいのちとし、すべての人々が救われなければ、自らも仏となりはしないと誓われた阿弥陀さま。分けない、分かるはずもない大いなるお慈悲が完成しています。仰せのまま、お聞かせいただきましょう。